

## ブラームス作曲「幻想曲」Op. 116の 楽曲分析と演奏法

八 木 宏 子

### ブラームス晩年の作風

ブラームス（1833－1897）の作風の変化は4つに分けられるが、今回取り上げた「幻想曲」Op. 116は第4期（1890～1897）の晩年に作曲された。そこでまずブラームスの晩年に属する作品の背景及び作風を探ってみた。

ブラームスは1890年に弦楽5重奏曲第2番Op. 111を完成したが、その時創作力の衰えを感じ、「内面的な靈感なしには作曲をすべきではない」という自己の主張によりOp. 111を期に作曲を断念し、作品の整理を始め、遺書の準備までした。しかし、1891年ブダペストで友人と楽しく過したことでOp. 112に含まれる「ジプシーの歌」が生れ、続いてOp. 122までの12曲の作品が作曲された。その中には傑作となった4つのクラリネット室内楽作品が含まれている。その名曲が生れた要因の1つは、1891年3月すぐれたクラリネット奏者のリヒアルト・ミュールフェルトとの出会いである。彼の名演は停滞していたブラームスの作曲への情熱を再び奮い立たせ、生涯ではじめてクラリネットを使った作品を完成した。即ち、ミュールフェルトの依頼により1891年夏にクラリネット3重奏曲Op. 114及びクラリネット5重奏曲Op. 115の2曲が仕上り、その後数年間をおいて、今度はブラームス自身の意向により、慎重にピアノとクラリネットの融合をよく考えた上で、1894年に2曲の「クラリネットとピアノのためのソナタ」Op. 120を完成した。ブラームスは筆が遅いので有名であったが、この一連の作は珍らしく短期間に書き上げられており、いかに再び靈感が目覚めたかがわかる。クラリネットの機能はこの時代にはモーツァルトの頃より大部改良されていて、表現の幅も広がっていたが、それを超えるミュールフェルトの高い演奏技術及び甘い美しい音色が、ブラームスにとって満足のゆく作品の現われとなった。そこで、彼以外にはこの作品の納得のいく演奏ができ得ないものと考え、楽譜出版を延したといわれている。モーツァルトにも晩年にクラリネット5重奏曲及びクラリネット協奏曲の傑作があるが、ブラームスにおいても、晩年の心境を表わすにはクラリネットの音色の渋さがぴったりであったのであろう。ブラームスのクラリネット5重奏曲は、そのモーツァルトのものと並んでクラリネット室内楽中の最高傑作といわれている。

晩年の特徴の1つにレントラー風様式があるが、これらのクラリネット作品に現われている。即ち、クラリネット5重奏曲における3楽章の序奏及びクラリネットソナタOp. 120の2の2楽章中間部である。

クラリネット5重奏曲が4期での一番大きな規模の曲であり、この期には合唱曲や交響曲は姿を消している。クラリネット3重奏曲の第1楽章の冒頭主題は交響曲用として、又ピアノの小品Op.118の6はその緩徐楽章のために考えられていたといわれているが、ついに第5交響曲は完成されることがなかった。

クラリネット3重奏曲、5重奏曲の2曲とクラリネットソナタの間に作曲されたのが、Op.116からOp.119までの20曲（1892年夏）のピアノ小品である。これらのほとんどは単純な3部形式で書かれており、Op.79（1879）の2つの狂詩曲以来のピアノ作品であり、その間には大学祝典序曲Op.80（1880）、悲劇的序曲Op.81（1880）、第2ピアノ協奏曲Op.83（1881）、第3交響曲Op.90（1883）、第4交響曲Op.98

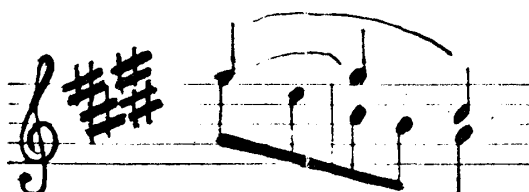
（1884）、2重協奏曲Op.102（1887）等の第3期に属する大曲が書き上げられている。これらの大作の後の晩年におけるピアノ作品は、あらゆる作曲技法を経験し、40年に渡った創作活動のエッセンスだけを表出している。これらの小品をブラームスは「自分の苦悩の子守歌」と呼んでいるが、重苦しい、物悲しい孤独、諦観を単純な形式と対位法の巧妙な使用で淡々と歌い上げた。即ち、Op.116の4はノクターン風に晩年の孤独を表わし、Op.117の1は民謡「不幸な母の子守歌」から取っているが、単純な美しさがある。Op.117の2は心の中を秋風が吹き抜けるような佻しい旋律である。Op.117の3は淋しさが漂い、Op.118の2は穏やかで慈愛に満ちている。Op.118の6は痛々しいほど物淋しい。Op.119の1については、ブラームスがクララに「各音符から孤独感をひき出すかのように響かなければならない」と述べており、クララはこの曲に対して「不協和音に満ちた魅力的な小品で、極めて悲しげであり甘い。又灰色の真珠のようである。曇っているが非常に貴重である」と述べた。

次にこれらのピアノ小品Op.116からOp.119の間には、お互いに類似点を見出すことができる。Op.116の3における冒頭の下行8分音符（譜例1）とOp.116の4の内声（譜例2）。Op.117の1の内声主要旋律（譜例3）とOp.118の5のはじめの部分（譜例4）さらにOp.118の2の中間部（譜例5）。Op.117の2の27小節の中声部（譜例6）とOp.117の3（譜例7）及びOp.118の6の主要旋律（譜例8）。さらに伴奏形の取り方として同一音の連打がある。Op.117の1の高音部（譜例3）、Op.117の3（譜例7）、Op.119の3冒頭（譜例9）がそれである。これらの共通点は、1892年夏に一挙に20曲作り上げられた事が原因しているかと思われるが、しかしそれが気にならないほど名作になっているのである。

譜例1



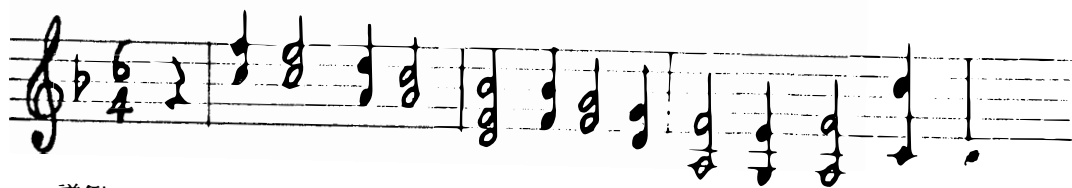
譜例2



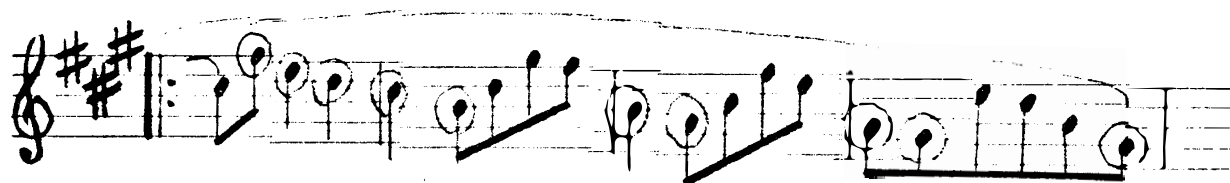
譜例 3



譜例 4



譜例 5



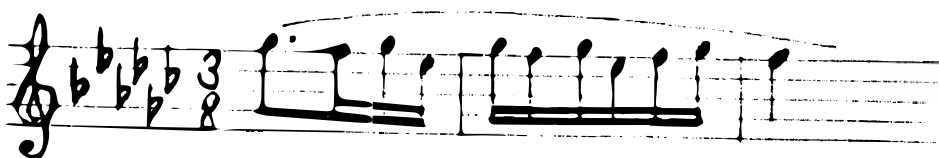
譜例 6



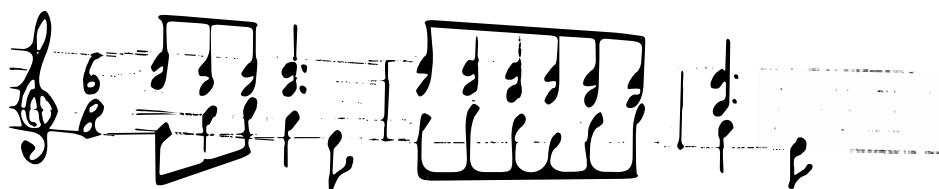
譜例 7



譜例 8



譜例 9



一方歌曲の晩年の作は、「バスのための4つの厳粛な歌」Op. 121である。これはクラリネットソナタOp. 120の2年後である1896年5月にウィーンで作曲された。クララが1896年3月に卒中で倒れ、同年5月20日死亡したが、クララと自分の死の予感が要因となり、この作品が生れた。他の友人が次から次へと死亡し、ブラームスは孤独感をひしひしと感じ、この歌曲によって晩年の慰めを見出していた。内容は厳粛で荘厳である。歌詞はすべて聖書から取っている。第1、第2曲は地上の空しさを、第3曲は死の祝福を表わし、死の近づきを感じるブラームスの気持が表われている。第4曲で愛による解脱を歌って荘厳にクライマックスを築く。第3曲ではたびたびブラームスの「死の動機」といわれている3度下行を使用している(譜例10)。この歌曲はクララの残された家族に捧げられた。

譜例10



最後の作品はオルガン曲「11のコラール前奏曲」Op. 122 (1896)である。死ぬ前年の作で、ブラームスの4曲あるオルガン曲の内、この作品は重苦しい気分を反映する典型的なものとなっている。ブラームスの体は、この作品創作中すでに致命的な病気の肝臓肝大と黄疸の症状が現われていた。「11のコラール前奏曲」の第11番は、「おおこの世よ、われ汝より去らねばならぬ」のコラールに基づいている。

これらの晩年の作品は、「4つの厳粛な歌」を除きすべてイシュルで作曲された。この地はウィーンの西200kmほどの所のブラームスの気に入っていた保養地で、1889年以来1896年までの毎夏をここで過していた。

## 楽曲分析と演奏法

題名「幻想曲」の由来ははっきりしていない。作曲者自身が出版者に「なにかよい表題を知りませんか」と聞いているぐらいなので深い意味があるとは考えられない。

### 第1曲 狂想曲 Presto energico d. moll

A (20小節 d moll)

B (16小節 F dur)

C (22小節 F dur - f moll - F dur)

A'a (8小節 d moll)

a' (16小節 d moll - a moll - cis moll)

a'' (20小節 cis moll - es moll - B dur)

C (29小節 B dur - b moll - es moll - b moll)

B (16小節 F dur)

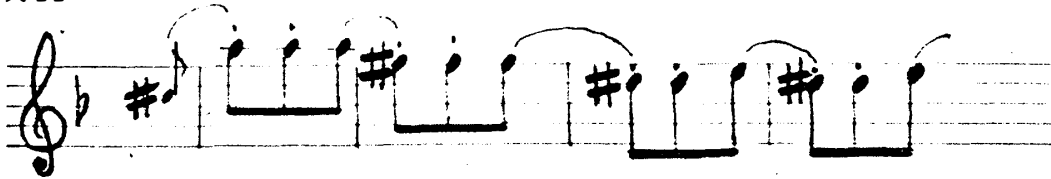
C (28小節 B dur - b moll - f moll - b moll - B dur - g moll - d moll)



A (32小節 d moll)

この曲は6度及び3度飛躍の音形「A」、半音階進行「B」、減7の分散形「C」の3つの要素を使い、ロンド風の構成をとっている。力強い曲で、左手も右手と対等に音量の点でバランスを考えて弾かねばならない。ブラームスの特徴のシンコペーションがふんだんに使われており、小節線に関係なくフレーズができていますので、8分の3拍子のリズムが乱れないように注意を要する。Cの左手減7の分散和音はオクターブのため難しくなっているが、レガートになるよう苦心する。A' a''の旋律線は譜例11となる。

譜例11



経過音や推移句が曲の流れを自然にするので、次に楽節の移行部を分析してみる。最初のAの終りからBに関しては、Bは全く新たな気分でPで始まる。つまりBの冒頭のC音から始まり、55小節のF durのIの和音で終止を打ち、次にV<sub>7</sub>の和音が経過的役目をし、d mollのVでA'の部が始まる。a'からa''への移りについては、a'の終りの4小節の変化がa mollのVは同時にE durのIであり、E durのIがcis moll Vへ変り、a''の冒頭はcis mollのIで始まる。さらに再現Aへの移行については170小節でA durのIに解決したかに聞えるが、その和音は同時にd moll Vであり、その4小節後にd moll VからIへと解決してAが現われる。

第2曲 間奏曲 Andante a moll 3部形式

A (18小節 a moll)

B (32小節 a moll)

A' (15小節+21小節 A dur-a moll)

素朴で親しみやすい曲である。A'のA durの部分はAの転回形が使われている。その旋律はAでは内声にあるが、気が付きにくい。そのため全く新しい旋律がA'で出て来たかのように聞える。Bは左手にある内声の流れをよく聞きながら、右手の旋律を指使いを駆使して非常になめらかに、しっとりとなら歌わせる。Bの終りは、右手に余韻を残しながら左手で波紋が漂い広がっていくように弾く。82小節の左手のDis音は、その小節まで緊張を高めるために意味がある。その次の小節で気分はがらりと変り、優しい雰囲気となる。

第3曲 狂想曲 Allegro passionato g moll 3部形式

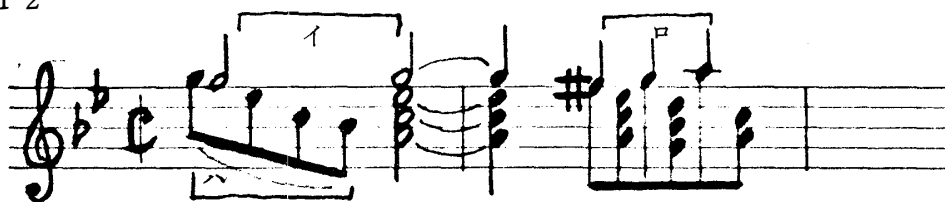
A (34小節 g moll)

B (36小節 Es dur-G dur-g moll-Es dur)

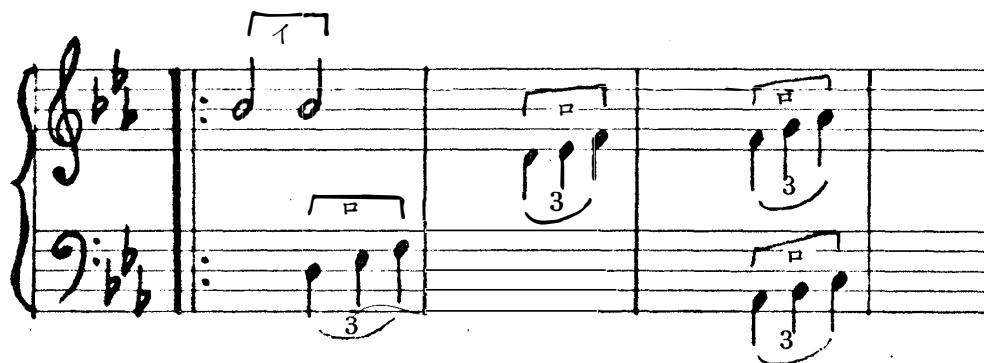
A (34小節 g moll)

譜例12の上声部と中声部がこの曲の要素となっているが、ブラームスの晩年の特徴である構成上の統一がここにみられる。即ち、譜例12のイ、ロはそれぞれBの冒頭(譜例13)でも使われ、又Aの大部分を占めているのは、13小節と83小節では2倍となり、さらに29小節と99小節、31小節と101小節に4倍となって拡大されている。Bは荘重で堂々としている。低音部の音をたっぷり響かせ、重みのある音で朗々と掛合いで歌う。Es durからG durへの転調は、A-As-G音の経過をたどりG durを導き出している。

譜例 1 2



譜例 1 3



## 第4曲 間奏曲 Adagio Es dur

Aa (14小節 E dur-H dur-e moll)

a' (22小節 E dur-gis moll)

B (16小節 E dur-A dur-Cis dur)

A'a'' (7小節 fis moll-E dur)

推移 (1小節 E dur)

B' (11小節 E dur)

この曲はノクターン風である。ここにはブラームス晩年の孤独な淋しさが漂っている。それは冒頭の低音部の部分動機から始まり、高音部の旋律間の休符にも表現されている。Aの旋律（譜例14）とBの旋律（譜例15）には関連がある。aからa'への移りは高音部Fis音、Fisis音を経過し低音部Gis音へと流れ、Aの主要部分動機が現われe moll. からE durへもどる。a'はaの変奏で始まり、内声音が加ってポリフォニックとなる。この高音部の内声音は、前述のように第3曲の冒頭と同形である。a''の終りは次の経過句への表現要求の燃焼を十分に待ち、テンポの許す限りにテヌートする。

譜例 1 4



譜例 1 5



第5曲 間奏曲 *Andante con grazia ed intimissimo sentimento*  
e moll 3部形式

A (10小節 e moll)

B (18小節 H dur - e moll)

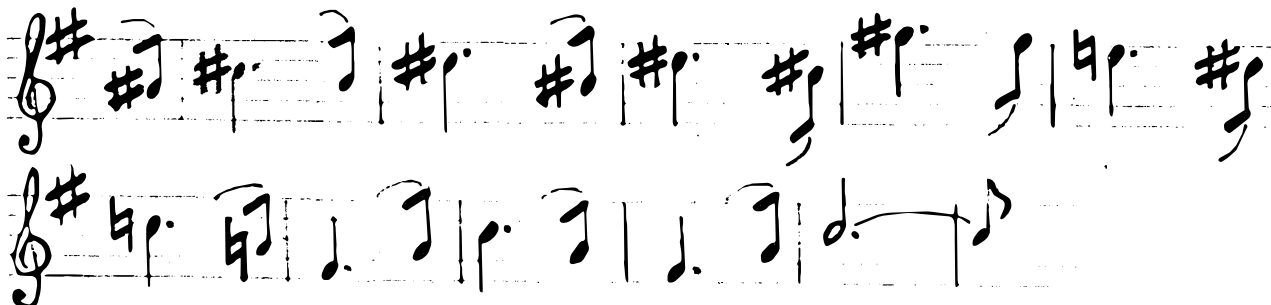
A' (11小節 e moll - E dur)

Aの旋律線は譜例16のようになる。この部分は一見易しそうに見えるが、和音のバランスを取り、旋律を浮き上がらせて弾くということが技術的に難しい。Aはシンコペーションのリズムを取り、各部分動機間の休符は旋律線上に生かすように弾く。Bの旋律線は譜例17のようになる。この曲は短調の曲であるが長調で終止する。さらに *sentimento* ばかりでなく *con grazia* であることの表現が難しい。この曲も淋しい曲である。

譜例16



譜例17



第6曲 間奏曲 *Andantino teneramente* E dur 3部形式

A (24小節 E dur - Cis dur - E dur)

B (18小節 gis moll)

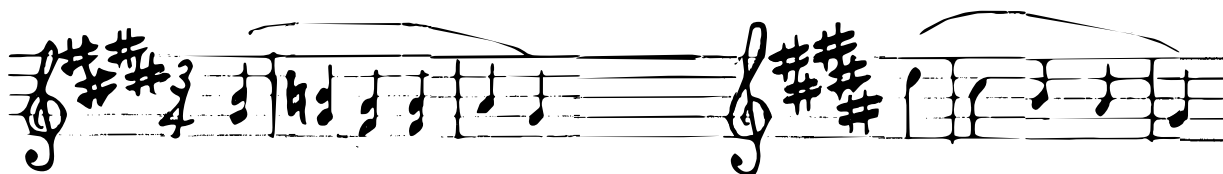
A (15小節 E dur - B dur - E dur)

コーダ (7小節 E dur)

Aは4声の厚みのある和声で作られている。*teneramente* の指示通り優しい、柔かい感情の曲である。AとBには譜例18 a, bでわかるように関連性がある。Aの最終音はgis moll I の和音であり、次のgis moll の音階的旋律に自然に導びかれるようにできている。その旋律は2度目には1オクターブ下で奏され、後又元の高さへと戻る。いかにも2種類の楽器で弾かれているかのように聞える。コーダの直前でE dur となり、Bの素材を使ってみごとに締め括っている。その内声の動きが美しく、低音部上声のA音の響きを聞きながら高音部下声の動きをA音に近づけ、この2声はGis音 (E dur I) へと解決する。内声がまず終止し、1拍遅れて上声部が終る。後は余韻となる。

## 譜例 18 a

## b



## 第7曲 狂想曲 Allegro agitato d moll 3部形式

A a (10小節 d moll)

a' (10小節 d moll)

B (26小節 a moll - A dur)

推移 (15小節 d moll)

A (12小節 d moll)

推移 (2小節 d moll)

コーダ (17小節 d moll - D dur)

この曲はリズムの上でよく考えられてできている。即ち、拍子を $\frac{2}{4}$ ,  $\frac{6}{8}$ ,  $\frac{2}{4}$ ,  $\frac{3}{8}$ と変化させているし、a'はaの変奏形であるが $\frac{1}{4}$ 拍遅れでagitatoの感じを出している。さらにその休符のパターンは次のBへ受けつがれる。又再現Aの前に効果的な休符を置いている。コーダではこの曲冒頭での減7の分散和音が和音に変えられ曲を引締めている。それらは作曲技巧の巧みさを示している。終止はD durである。短調の曲が最後に来て長調で終らせるという形はバッハでもよくあることであるが、ブラームスの晩年の作「4つの厳粛な歌」についても1, 2曲は短調であるが、3曲目ではホ短調で死の痛々しさを歌い、ホ長調で死を祝福する。第4曲は変ホ長調で「最も大なるは愛なり」と歌う。このピアノ作品でも長調に転じているのは、死の苦しみから悟りの境地に入ること、又死後天国へ召されて幸せとなるという思想を表わしているものと考えられる。

## 参 考 文 献

カール・ガイリンガー (山根銀二訳) : 「ブラームス」 音楽之友社 (1952)

門馬直美 : 「ブラームス」 音楽之友社 (1965)

世界大音楽全集「ブラームスピアノ曲集Ⅱ」 音楽之友社 (1957)

世界大音楽全集「管楽名曲集」 音楽之友社 (1960)

世界大音楽全集「ブラームス歌曲集Ⅱ」 音楽之友社 (1957)

Brahms, Klavier-Werke von Emil von Sauer, Edition Peters

Brahms, Sonate für Klarinette und Klavier f moll Op.120

No.1, Wiener Urtext Edition